高知県立文学館
高知県立文学館ニュース
藤並の森
vol. 112
2026.3

リレー随筆

# 「女流作家」から「女性作家」そして「作家」へ

尾形　明子

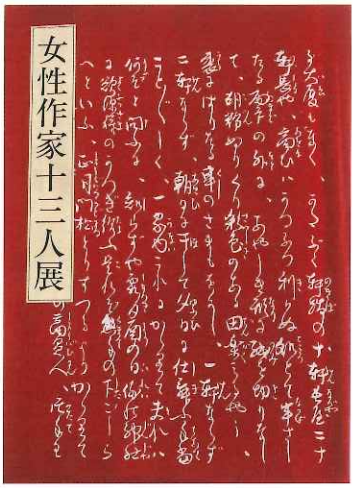
かつて女性作家は「女流作家」と呼ばれた。「男流作家」の言葉はないから、作家＝男性。そのなかを一筋の川が流れている、というイメージだろうか。

円地文子さんが、昭和はじめ、文壇にデビューした当時について私に語ってくれたことがあった。

「男の作家は地縁、血縁、学閥――あらゆるコネクションを利用して、のし上がっていくの。でも女性にはなにもない。生け花の根〆のようなもの。剣山を隠す根〆なら許されるけど、そこから上に出ようとしたら、とたんに切られてしまう」。

「女流作家」が「女性作家」に大きく傾いたのは、1988年10月、東京池袋の東武デパートで開かれた『女性作家十三人展』（日本近代文学館主催）だった。私が、はじめて企画から参加した文学展だった。樋口一葉、与謝野晶子、田村俊子、野上弥生子、岡本かの子、宮本百合子、平林たい子、林芙美子、円地文子、壷井栄、宇野千代、佐多稲子、有吉佐和子の13人の作家たちを展示した。

お元気だった宇野千代さん、佐多稲子さんを先頭に、河野多恵子（女流文學者会会長）さんをはじめ、おおぜいの女性作家が会場に足を運ばれた。着物姿の宮尾登美子さんは、同行の方と語り合いながら、熱心に見ていられた。



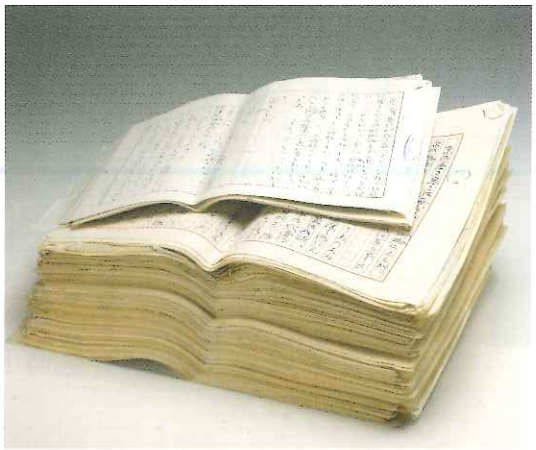
日本近代文学館で開催した「女性作家十三人展」図録

『朝日新聞』に「きのね」の連載が始まったばかりだったから、お忙しいのにと意外に思った。「きのね」も愛読していたが、1981年5月から翌年8月まで同紙に連載された「序の舞」に夢中だった。当時私は、大学の教員になり、研究者としてスタートを切ったばかり、しかも二人の幼い子どもがいた。ほっとできる唯一の時間が、夕刊を広げて「序の舞」を読む時だった。京都の葉茶屋で生まれた津也が、やがて美人画の第一人者となるまでの、まさしく波乱万丈の生涯をひたすら読んでいた。続きが待ち遠しくてたまらないワクワク感は、幼い日、物語を読むときの楽しさに似ていた。

実在のひとりの女性の生涯が放つ魅力にとらえられた1年3か月だった。やがてかなりの補筆、加筆を経て単行本になった。改めて読んで、私を夢中にしたのは、上村松園をモデルとした女主人公を描き切った宮尾登美子という作家だったのだと気付いた。時代に翻弄されながらも自らの意志を貫き逞しく生きる女主人公に、作者は満身の思いを込めて自らの生を託した。物語の主人公と作者自身の生とが混然と溶け合って、リアリティある主人公が動き出した。なぜあの時、宮尾さんに「ファンです」と叫んで握手を求めなかったのだろう。

いつのまにか「女性作家」という名称もほとんど消えた。近年、芥川賞、直木賞の受賞作家はほぼ同数。文芸誌に登場する作家も、男女云々の時代ではない。「女流作家」が「女性作家」となり、そしてひとりの「作家」となった。ようやく文学界でのジェンダーフリーは完成したようである。

（文芸評論家）


宮尾登美子「序の舞」完成稿

高知県立文学館 令和8年度 春の展覧会

次回開催

# 生誕100年記念 宮尾登美子展 ～生きてゆく力～

令和8年 4月11日(土)≫6月28日(日)

今春、高知県立文学館では、「生誕100年記念 宮尾登美子展～生きてゆく力～」を開催します。

大正最後の年となる大正15年4月、高知市緑町四丁目に生まれた宮尾登美子は、家業への劣等感、辛酸をなめた満洲からの引揚げ、苦節を味わった下積み時代…そのすべてを糧として47歳で作家として花開きました。

昭和・平成を代表する大作家となった宮尾の命題は「女性の一生を描く」こと。「女性の生き方というのは、その時代に反映される」。いつの時代でもそれぞれの環境の中で粘り強く、より良い方向を目指す。そんな女性の生き方を丹念に描いた作品の数々が多くの読者に支持されてきました。

本展では、宮尾作品に描かれたヒロインたちの生き方を時代背景を通して見つめ、今を生きる私たちへのメッセージを探ります。

「新刊ニュース」1979年4月号(トーハン)掲載の「私の近況」より

## 第1章 宮尾登美子 八十八年の生涯

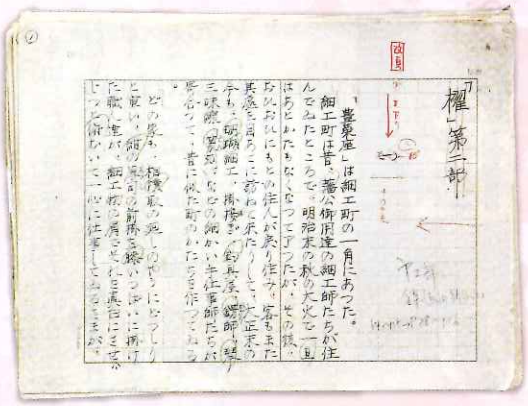
大正末年に芸妓娼妓紹介業を営む父のもとに生まれ、少女時代を戦争のさなかにすごし、17歳で結婚後、満州へと渡る…。作家・宮尾登美子の生涯を、年譜や写真、貴重資料で振り返ります。

## 第2章 大河小説の世界～自伝的四部作『櫂』『春燈』『朱夏』『仁淀川』～

自伝的四部作『櫂』『春燈』『朱夏』『仁淀川』について、作家・加賀乙彦はこの4作品に『岩伍覚え書』『寒椿』を加えた6作品は大河小説になるだろう、と高く評価しました。

芸妓紹介業の父・岩伍の商いと母・喜和の苦悩、自身を投影した主人公「綾子」の成長、綾子とともに過ごした「仕込みっ子」たちそれぞれの行く末、戦争へと突入していく時代情景、敗戦、引揚げ、そして戦後の暮らし…。

高知を舞台にした一家の幾春秋を丹念に描いた作品群を、直筆原稿や創作資料等を交えてご紹介します。



「櫂」第二部原稿

## 第3章 明治、大正、昭和 女ものがたり～女性の生き方を見つめて

宮尾作品の一貫したテーマは「女性の生き方」。一絃琴に魅せられた女性二人を描いた『一絃の琴』、圧倒的男性優位の日本画壇で愛に苦悩しながらも前人未踏の美人画の境地に到達した『序の舞』、梨園の世界でひたすらに耐え、尽くし、真実の愛を手に入れた女性を描いた『きのね』など、伝統美や日本的風土を背景に、それぞれの女性が生きた道を丹念に辿り、現代へと蘇らせてきました。

主人公は皆、女性にとって窮屈な時代を生きてきましたが、伝統や因習、その時代の倫理や作法を守りながらも、信じた道をひたすらに歩み、ついには高みへと到達するその姿が多くの現代女性たちの心を打ち、長く愛される作品となっていきました。

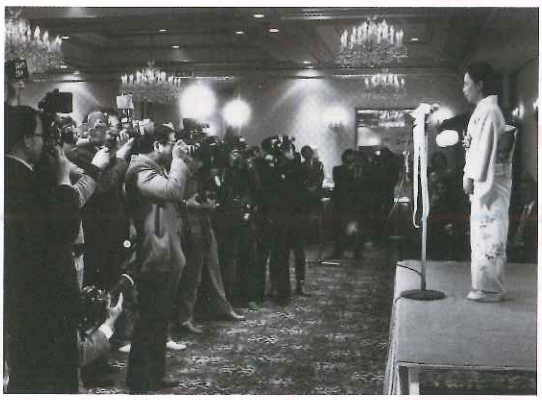
この章では、時代背景とともにそれぞれのヒロイン像をみつめます。

## 第4章 めぐる季節を生きて

作家として紡いできた言葉や、在りし日に身を包んだ着物、愛しんだ品々を時代時代の写真とともに展示し、宮尾登美子が生きてきた人生の色彩をみつめます。

この他、展覧会関連企画として、親交の深かった作家・山本一力先生による記念講演会、文芸評論家でNPO法人女性文化研究所理事の尾形明子氏による記念講演会など、より深く宮尾文学に触れる機会を設けています。ぜひお越しください。

(学芸課/岡本美和)



昭和54年 第80回直木賞贈呈式の様子

文豪が教える、見えない世界の歩きかた。

# 怖い文学展

## ～高知県立文学館×香美市立美術館～

令和8年1月17日(土)≫3月22日(日)

好評開催中【レポート】

展示の様子

現在、当館では「怖い」に様々な切り口で迫る企画展を開催しています。

昨今の怪談ブームを受け、なぜ私たちは怖いものに惹かれるかを軸に、今回はじめて香美市立美術館とコラボレーションを試みた本展。寒い季節の開催ではありますが、お客様はじっくりと、それぞれ好きな怖さを楽しんでくれています。

ロビーでは妖怪の紹介からはじまり、県内在住の創作人形作家・あだち杏さんと生徒の皆さんによる妖怪・妖精をテーマにした創作人形作品を15点展示。小泉八雲も愛したろくろ首や雪女、ブームになったアマビエ、美しい人魚など、立体ならではの存在感が目を引きます。

怖い詩や怖い短編を読みながら展示室に入ると、香美市立美術館所蔵の「怖い絵」が登場します。坂上貞宣・小作青史・日和崎尊夫・福冨栄ら、高知県出身の画家による不思議で怖い絵を16点借用しました。

詩も絵も、「怖がらせよう」と意図して創作された訳ではない反面、私たち受け手側が作品から感じる印象はなんとも形容しがたい怪しい魅力を放っています。開幕2日目には香美市立美術館の都築館長をお招きし、香美市美でこれらの作品が所蔵することになった経緯や、画家の人柄を分かりやすく解説していただきました。お客様からは「今回の展示は"読む"だけじゃなく、"見る"、"感じる"怖さもあって面白い」など嬉しい声もいただいています。

香美市立美術館　都築館長によるトーク

「視える」作家として多方面に活躍している加門七海さんにご協力いただいたQ&Aや、高知の貴重な妖怪資料、田中貢太郎・馬場孤蝶・松谷みよ子ら高知ゆかりの文学者紹介もぜひご覧いただきたいコーナーです。なかでも、アンソロジストの東雅夫さんに多大なるご協力をいただき作成した「怪談年表」は、夏目漱石、泉鏡花、小泉八雲、芥川龍之介ら明治～昭和初期に活躍したおばけ好き文豪の執筆活動や怪談会の様子が分かるようになっており、彼らと高知ゆかりの文学者との意外なつながりも知ることができます。

「怖い文学展」は3月22日まで開催しています。香美市立美術館でも部分展示をしていますので、2館あわせて、それぞれの怖さをお楽しみください。

（学芸課／福冨陽子）

レポート

# 「短詩型文学　その魅力」

1月4日に無事閉幕した企画展「短詩型文学　その魅力」。展示では、新収蔵品も含めて主に当館の収蔵品を展示したことに加え、土佐高知の俳句・短歌の歴史を広く一般の方に知ってもらえるように、県内高校の文芸部や俳句同好会、障がい者福祉支援施設とのコラボ展示、県内の俳句・短歌結社の紹介、ジオラマを使った県内の歌碑・句碑の紹介など、県内の俳句・短歌の魅力に触れてもらえるような試みを行いました。結果、若い人も含め、広い年代のお客様がご来館くださいました。

イベントも好評で、12月7日に開催した岡本真帆さんの記念講演会では、自分も創作活動をしているという方や熱心なファンにも参加いただき、岡本さんのお話も相俟って活気のあるものとなりました。最終日の神野紗希さんの講演会では、添削指導などもあり、皆さんが非常に熱心に聞き入っていたのが印象的です。俳句・短歌の吟行も大変好評で、吟行の後、県内の俳句結社に入った方もおられたと聞きました。

幅広い世代に興味を持っていただいた文学と人、地元と人を結び付ける企画展であり、また創作の楽しさを感じられる機会にもなりました。これまでさまざまな角度で高知県の文学を深掘りしてきましたが、今回短詩型という新たな魅力を紹介することができ、嬉しく思います。

（学芸課／川島禎子）

岡本真帆さん記念講演会のようす

「初めての吟行、初めての句会」田村乙女さんとの吟行のようす

トピックス

# 市原麟一郎 土佐民話資料集 刊行のご案内

令和5年9月に101歳で亡くなった土佐民話継承の第一人者・市原麟一郎先生が掘り起こし、記録し、そして伝え続けてきた土佐民話を次世代に引き継ぐ一助となればと願い、この度『市原麟一郎 土佐民話資料集』を刊行しました。

資料集には、市原先生がこよなく愛した土佐民話の豊かさ、面白さを存分に味わっていただけるよう、様々に工夫を凝らしました。

市原先生が採話した民話の中から182話をピックアップし、わかりやすいキーワードにして地図上にマッピングした「高知県民話マップ」では、同じキーワードの民話が県内のどこに分布しているのかを俯瞰することができます。圧倒的に多いのは「渕」のキーワード。高知県には実に多くの大小の河川が流れ、無数の渕があります。そして渕に伝わる伝説が各地に残されています。

各地にどんな伝説が伝わっているのかは、資料集の「市町村別民話ピックアップ」でご覧ください。蛇性になった姉妹が旅をして渕に向かう話や、渕の主に魅入られた女性の話など、民話のエッセンスをこの一冊で楽しむことができます。

さらに、巻末には市原先生の著書を網羅した五十音順総目次を収載。類似の話やおなじテーマの話を調べることができます。資料集は当館こどものぶんがく室で閲覧いただけるほか、県内図書館、各学校へ配布するとともに、館内ミュージアムショップにて販売しております。

土佐民話研究の基礎資料として、地域振興の一環として、また、各学校等での郷土学習の資料として、幅広くご活用ください。

（学芸課／岡本美和）

111 土佐文学さんぽ Tosa Literature Walk

# 『土佐日記』停泊の地(2)

前号では紀貫之たちが留まった「大湊」という地をとりあげました。今回はその続きで、停泊中のある日の出来事と碑を紹介します。

貫之が承平4年の内に帰京できなかったのは、新国司・島田公鑒の土佐赴任の遅れによるものであったとされます。この人物は貫之を宴のために大津から国府へ呼び戻したり、和歌を詠み合ったりしましたが、その無礼さや風流に欠ける様子から、しばしば冷淡に皮肉めいて描かれています。

結局、貫之は叙位の日などの重要な正月の行事に参列が叶わなかったため、失意や不満を「(正月)七日になりぬ」という強調された書き方にこめたのでしょう。

この日の日記にある「白馬(あおうま)の節会」も正月の宮中行事で、天皇が白馬を御覧になり邪気を払い、その後臣下に宴を賜うというものです。望京の思いを募らせる貫之は、立つ波の白さを馬にみたてて節会を思います。

そんなときに「池」に住む「よき人」(夫に伴い京から下ってきた身分のある女性)から籠に入った魚や若菜が届きました。この「池」という地名は現在の「高知市池」であるとされます。

『土佐日記』のこの記述を顕彰して「よき人」からおくられた和歌が刻まれた碑が県立池公園の駐車場からすぐ、池公民館の南側に建っています。

「あさぢふの野辺にしあれば水もなき池に摘みつる若菜なりけり」という歌で「池という地名ですが実際は荒れた野原で、水もない「池」で摘んだ若菜でございます」という内容です。若菜は「若菜摘み」という京での風習を思わせるものであり、貫之は「いとをかしかし」と、同じ都人である女性からの歌を称賛しています。

また、碑の裏側には建立のいきさつが記されています。この碑はまさに「あさぢふの野辺」のような場所にありますので、見えにくいですが気になる方はご確認ください。

日記では「よき人」の記述のあと、その風雅さを打ち消す土佐の田舎歌仙や、純真で歌の上手い童の登場など、大湊滞在の退屈ぶりを紛らすようなおもしろい展開になります。

この印象的な七日の条の二日後、貫之一行は大湊から船を進め、次の地へ向かいます。

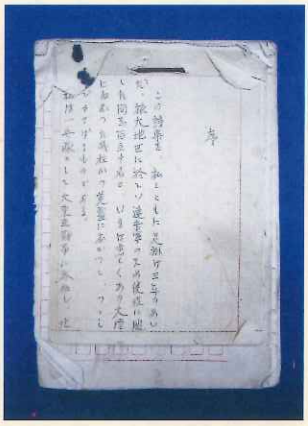
(学芸課/笠岡花菜子)

高知市池にある「土佐日記」の碑

## 資料受贈報告

### 寄贈資料から

川島豊敏詩集『肉體』草稿
昭和22(1947)年(推定)
200字詰原稿用紙197枚ペン書
坪野亜朱氏寄贈



川島豊敏[大正4~昭和23(1915~1948)]は高知県香美郡大楠植村(現・香美市土佐山田町)生まれの詩人。昭和10年、二十歳となる年に満洲へ渡り、翌年同地で就職。島崎曙海と詩誌「仏手柑(ぶしゅかん)」「成吉思汗(ちんぎすかん)」「二〇三高地」を順次発行し、第一詩集『北堡壘』を刊行。時局による詩誌統合の際には、満洲詩人会を結成し「満洲詩人」を創刊、その編集にあたるなど、満洲詩壇の中核を担う一人となりますが、昭和19年3月、現地応召。敗戦後、1年半近くにわたり、ソ連軍使役として中国東北部に抑留されます。この間、川島は抑留生活の記録詩篇を手製の手帳に書き継ぎ、昭和22年4月、生家に戻ります。

右の写真は、検閲をまぬがれるために服地に縫い込んで持ち帰ったというその手帳をもとに、川島が刊行に向けて取りまとめたものと推定されます。稿本は、序、「動脈」篇、「肉體」篇、「靜脈」篇、跋、目次の順で綴じられ、1枚目に赤鉛筆で「詩集「肉体」原稿」とあります。しかし、すでに病身であった川島は、原稿が活字になるのを見ることなく、32歳の生涯を閉じました。

執筆の趣旨を述べる序文、抑留生活の実態を具体的に記した跋文から、なんとしても書き残しておきたいという川島の強い意志を感じますが、その思いが刊本、詩集『肉體』となって結実したのは、没後40年近く経った昭和61年7月。遺族や詩友、後進の詩人らの尽力により、稿本のうち、ソ連軍による収容から帰郷までの日々を書いた「動脈」篇及び「肉體」篇を本編とするかたちで、土佐出版社から刊行されました。

詩集『肉體』の詩には、過酷な状況ばかりではなく、強かに生きる仲間の姿や希望を抱かせたであろう光景が書き留められています。川島に詩があり、自らに書くことを課したからこそ、生きて再び故郷の桜を目にすることができたのではないかと、そんなことを思わせます。

(学芸課/小松路代)

## 受贈報告

(令和7年11月~令和8年1月)敬称略

▼西村 淳・「湖口 小山いと子著 砂子屋書房刊」他
▼甲藤幸哉・「青年時代 大町桂月著 大倉書店刊」
▼祥伝社・「みこころ 風の市兵衛 弐 辻堂魁著 祥伝社刊」
▼白泉社・「ぱ・び・ぷぺんたくん 絵・キャラクター:柴田ケイコ 作:林 木林 白泉社刊」
▼中央公論新社・「断腸亭主人 ―荷風全集附録― 中央公論新社編刊」
▼四宮義正・「私家版 第三・寺田寅彦の光跡を求めて 四宮義正著刊」他
▼中城正堯・「波まかせ 風まかせ ―黒潮育ち編集者、書き納め― 中城正堯著 江戸子ども文化研究会刊」
▼林 亮・「林亮詩集 林亮著刊」
▼村田三恵・「21世紀現代短歌選集7 東京四季出版編刊」
▼田上悦子・「歌集 早春の譜 第11集 高知県退職婦人教職員連絡会短歌サークル編刊」
▼永森 治・「橙黄橘緑のころ ~漢詩を楽しむ日々~ 永森 治著 高知新聞総合印刷制作」
▼山形敬介・「詩文誌GUILTY 52号 ギルティ編集局編刊」
▼林 静雄・「スタイル別 蓄音機入門 林 静雄著 チーム医療刊」
▼日本歌人クラブ・「日本歌人クラブ アンソロジー2025年版 現代万葉集 日本歌人クラブ編 短歌研究社刊」

このほか、全国の個人・関係機関の皆様から図録など数多くの資料をご寄贈いただきました。厚く御礼申しあげます。

# 常設展示室入替

## 常設展入れ替えのご案内

**高知県立文学館の常設展示室は、「変わる常設展」。年に一回、数名の作家を入れ替えています。**

令和7年度は「反骨の大衆文学」コーナーの馬場孤蝶を森下雨村に、「現代の文学」コーナーの田中英光を倉橋由美子に、「近現代の詩歌」コーナーの槇村浩を上田秋夫に入替えました。

森下雨村は明治23年佐川町に生まれ、早稲田大学卒業後博文館に入社。雑誌「新青年」の初代編集長として江戸川乱歩や横溝正史を発掘した「探偵小説育ての親」と呼ばれています。展示では、雨村と乱歩の交流がわかる、松野一夫画、江戸川乱歩讃の画軸「雨村釣り師像」などを展示しています。

倉橋由美子は昭和10年土佐山田町生まれ。昭和35年、明治大学在学中に学長賞を受賞した「パルタイ」が「文学界」に転載され彗星のごとくデビュー。以後、カフカ、カミュ、サルトルなどの実存主義文学の影響を受けた数々の作品を発表。同時代の若者の憧れの的となりました。直筆原稿や初版本などを展示し、倉橋の作家活動をご紹介しています。

上田秋夫は明治32年土佐町に生まれ、県議会議員で土佐電鉄重役の上田保の長男として生まれます。大正14年に東京美術学校を卒業後、昭和3年にフランスに渡り、作家のロマン・ロランや、マルセル・マルチネと親交を結びます。ノーベル文学賞受賞者で世界的文学者であるロマン・ロランの薫陶、左翼詩人マルチネとの家庭的な交友は上田の人生の精神的な背景となりました。展示では、ロマン・ロランから上田秋夫へ宛てた書簡など貴重資料を展示しています。

企画展とともに常設展示もぜひお楽しみください。

（学芸課／岡本美和）

「現代の文学」コーナー倉橋由美子の展示

# 常設展企画コーナー

**期 令和8年4月1日(水)～令和9年3月22日(月祝)**

**常設展の企画コーナーでは、毎年度展示を入れ替え、多彩なテーマで文学を紹介しています。**

**4月からは「西澤保彦追悼展」と「収蔵品展」で構成し、展示を行います。**

令和7年11月に逝去された作家・西澤保彦さん（1960～2025）を偲び、「西澤保彦追悼展」を開催します。

西澤さんは高知県安芸市の出身です。安芸高校を卒業後、米国私立エカード大学創作法専修を卒業されました。

帰国後熱心に執筆活動を続け、平成7（1995）年に『解体諸因』で作家デビュー。本格ミステリにSF要素、緻密なロジックを合わせた独特な作風で知られました。

ジェンダーを扱った作品も多く、平成15（2003）年に『両性具有迷宮』で第2回Sense of Gender賞特別賞を受賞、令和5（2023）年に『異分子の彼女 腕貫探偵オンライン』に収録された「異分子の彼女」で第76回日本推理作家協会賞（短編部門）を受賞されました。

『七回死んだ男』や『人格転移の殺人』、『スナッチ』、『走馬灯交差点』など著書多数、「匠千暁」や「腕貫探偵」といったシリーズ作品も人気です。また、西澤さんは高知県在住で執筆活動を続けられ、高知が舞台の作品もあります。

追悼展では当館が所蔵する数々の著書などの展示から、西澤さんの作家としての歩みに触れていただければと思います。

加えて企画コーナーでは記念の年を迎える高知県こども詩集『やまもも』の紹介や吉井勇書簡、田中英光資料など、当館の新収蔵品を展示します。

来年度の企画コーナーも、ぜひご覧ください。

（学芸課／笠岡花菜子）

西澤保彦さんによる講演会の様子（平成21年）

## ショップより

ただいま開催中の企画展【怖い文学展～高知県立文学館×香美市立美術館～】（3月22日(日)まで）に合わせ、ミュージアムショップでは注目の加門七海先生の代表作を始め東雅夫先生監修の怪談ほか、田中貢太郎、小泉八雲、泉鏡花など怖い話や不思議な話に関する書籍や、2022年にカクヨムWeb小説短編賞2021特別賞を受賞、翌年『怪異の掃除人　曽根崎慎司の事件ファイル』で第10回ネット小説大賞を受賞しデビューした高知県出身の作家長埜恵さんの書籍も販売しています。その長埜さんの大好きな「クトゥルフ神話」など関係書籍も多数取り揃えました。棚に並ぶ本を眺めてみますと、装丁からして背筋が凍ります！

また、「土佐化物絵本」に出てくる化け物が目を引く当館オリジナルのグッズ（クリアファイル3種類、ポストカード4種類）は年間を通して人気のある商品です。

当館にお越しの際は、ミュージアムショップにもお立ち寄りのうえ、ぜひお手に取ってご覧ください。

（総務事業課／森光美和）

## 館長エッセイ

# 登録博物館としての新たな一歩

澤田　博睦

JAPAN MUSEUM
登録博物館

今年は「よさこい高知文化祭2026」（国民文化祭、全国障害者芸術・文化祭）が、10月25日(日)から12月6日(日)まで高知県で開催されます。「心躍る、文化咲く」をキャッチフレーズに、県内各地で多彩な文化イベントが予定されています。

本県の特色ある文化芸術を全国に発信するとともに、中山間地域などに伝わる伝統芸能の再興、継承につなげる契機とし、あわせて、文化芸術による魅力ある地域づくりにもつなげていくといった基本方針が示されています。

ちょうど高知県芸術祭の時期でもありますので、本県の地域性を活かした文化芸術をご覧いただくことで全国の皆様をおもてなしする機会にもなるでしょう。

当館でもその時期には、絵本『お月さんももいろ』（ポプラ社）などの著者として知られる松谷みよ子生誕100年を記念した企画展を開催したいと考えています。地域の伝承を題材にした物語などを多数手がけられた松谷先生の足跡を通して、地域に根付く文化をみつめなおすきっかけになればと思います。

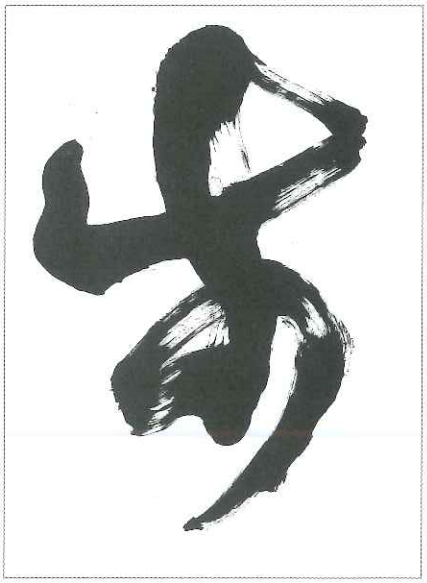
また、生誕100年と言えば、今年は地元高知出身の作家、宮尾登美子生誕100年でもあります。当館は宮尾先生の関連資料を約5千点近く所蔵しており、「宮尾文学の世界」室を設けて、毎年切り口を変えて入れ替え展示を行っています。太宰治賞の『櫂』や直木賞の『一絃の琴』、映像化された『陽暉楼』『鬼龍院花子の生涯』など数多くの作品で知られ、当館を特徴づける顕彰作家宮尾先生。来る4月11日からはじまる企画展において、宮尾文学や作家の実像に迫る展示を予定していますのでお楽しみに。

このように高知県立文学館は、本県ゆかりの文学者を顕彰し、高知の文学の魅力を広く伝えていくことや、県民の皆様に文学への関心を高めていただくことを館の基本理念として、様々な活動をしています。

これまでは、博物館法に基づく博物館の類似施設として位置づけられていましたが、令和5年施行の改正博物館法では類似施設の位置づけがなくなるのを契機に高知県として博物館登録を申請し、令和7年12月23日晴れて登録博物館として新たな一歩を踏み出すこととなりました。

もとより登録博物館に認定されることがゴールではありませんが、本県の文化芸術の振興を目指して、職員一丸となって調査研究、成果の還元、学習支援や県民活動支援に取り組んできたことを有形無形の県の財産として次世代につなげていくとともに、時代の潮流を捉えて質の高いサービスを提供していくためにも、博物館登録はよい機会になると考えています。

今年の春は生誕100年記念宮尾登美子展、秋にはよさこい高知文化祭2026期間中に生誕100年記念松谷みよ子展があり、来年は当館の開館30周年を迎えます。そして再来年は寺田寅彦生誕150年と、記念の行事が目白押しです。高知県立文学館は、地域に根差し地域とともに発展していく博物館として歩んでまいりますので、今後も皆様のお力添えを賜りますようよろしくお願いいたします。



「歩」

高知県立文学館ニュース 第112号 令和8年3月2日発行 〒780-0850 高知市丸ノ内1丁目1番20号 電話088-822-0231 FAX 088-871-7857

## 高知県立文学館カレンダー

- 会　期　令和8年1月17日(土)≫3月22日(日)
- 開館時間　午前9時～午後5時（入館は午後4時30分まで）
- 休館日　会期中無休
- 場　所　2階 企画展示室
- 観覧料　600円（常設展含む）長寿手帳等お持ちの方・高校生以下は無料

展覧会の紹介をしています！詳しくは3ページ目をご覧ください。

### 生誕100年記念

次回開催

# 宮尾登美子展

### ～生きてゆく力～

- 会　期　令和8年4月11日(土)≫6月28日(日)
- 開館時間　午前9時～午後5時（入館は午後4時30分まで）
- 休館日　会期中無休
- 場　所　2階 企画展示室
- 観覧料　600円（常設展含む）長寿手帳等お持ちの方・高校生以下は無料

写真提供　朝日新聞社

展覧会の紹介をしています！詳しくは表紙・2ページ目をご覧ください。

### 展覧会予定

#### ▶体感するファーブル昆虫展

- 期　間　令和8年7月25日（土）～9月27日（日）
- 場　所　企画展示室
- 観覧料600円（常設展含む）

#### ▶生誕100年記念　松谷みよ子展 ～こころの学び舎～

- 期　間　令和8年10月17日（土）～令和9年1月11日（月・祝）
- 場　所　企画展示室
- 観覧料600円（常設展含む）
  （※12月27日～1月1日は年末年始のため休館）

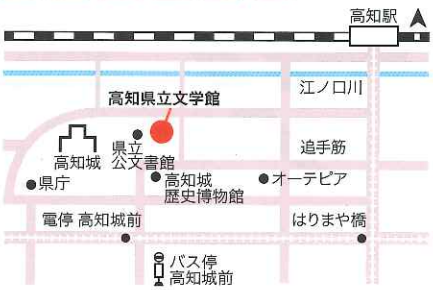
#### ▶ちちははの目、子どもの声 ～文学作品にみる親子像～

- 期　間　令和9年1月23日（土）～3月28日（日）
- 場　所　企画展示室
- 観覧料600円（常設展含む）

## 利用案内

開館時間　午前9時～午後5時（入館は午後4時30分まで）
休館日　年末年始（12月27日～1月1日）を除き、無休
※その他、メンテナンス等で臨時休館することがあります。
観覧料　企画展開催期間（常設展含む）…企画展ごとに異なります。
企画展を開催していない期間（常設展のみ）…一般400円
20名以上の団体は2割引。高校生以下無料。
身体障害者手帳、療育手帳、精神障害者保健福祉手帳、戦傷病者手帳、被爆者健康手帳をお持ちの方とその介護者（1名）、高知県・高知市長寿手帳をお持ちの方は無料です。
（窓口で手帳等のご提示をお願いする場合があります）
駐車場　なし。ただし近隣に有料駐車場があります。
附帯設備　ホール、ミュージアムショップ、こどものぶんがく室、茶室「慶雲庵」
貸出施設　企画展示室、ホール、茶室
運営　公益財団法人　高知県文化財団

## 交通のご案内




- JR高知駅から徒歩20分（またはバス・路面電車を利用）
- バス・路面電車「高知城前」から徒歩5分
- 高知龍馬空港から空港連絡バス「北はりまや橋」下車、徒歩20分

高知県立
文学館
〒780-0850
高知市丸ノ内1丁目1-20
電話 088-822-0231
FAX 088-871-7857
高知県立文学館 検索